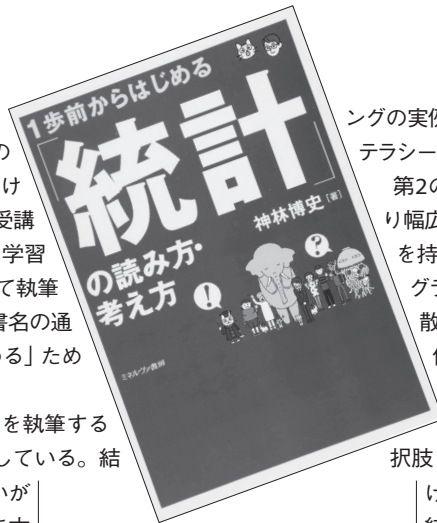


本書は、統計リテラシーの入門書である。大学のカリキュラムにおける位置づけとしては、社会調査士科目を受講する前に統計的思考の基礎を学習する授業のテキストを想定して執筆されている。その意味では、書名の通り統計学を「1歩前からはじめる」ためのテキストといえよう。

著者は、「あとがき」で本書を執筆するにあたっての3つの狙いを示している。結論から言えば、この3つの狙いが見事に実現されていることに本書の魅力がある。

第1の狙いは、統計やデータに「だまされないこと」よりも、統計やデータの読み取りや提示ミスにより、「自分が間違えないこと、(自分のミスによって)他人をだまさないこと」を読者に伝えることである。著者はまず、「統計情報を正しく理解し、そこから得られた情報を他の人や社会に伝える力」である「統計リテラシー」が、21世紀の新しい「市民的教養」になると指摘する。統計リテラシーを身につければ、仕事の道具として「自分のためになる」だけでなく、「証拠に基づいた議論」の重要性を認識し、それに基づいた政策決定をすることにより「社会のためになる」と説く。そして、統計が信頼できるかどうかを判定するチェックポイントとして「6W4H」に着目することを勧める。つまり、データに接したときに、「誰が、誰を(対象に)、なぜ、いつ、どこで、何を、どのように(調査対象の選び方、調査の方法、質問の方法、ケース数)調査したかを確認することが重要だということである。統計の信頼性に関する具体例は豊富に提示されており、例えばブータンの「国民総幸福量」の根拠となった調査の問題点など、興味深い事例が紹介されている。第14章では、「若者の海外旅行離れは本当か？」という問いを立て、証拠に基づいた議論のトレーニ



1歩前からはじめる 「統計」の 読み方・考え方

神林博史 著

ミネルヴァ書房
2016年
A5判, 340ページ
2,376円

ングの実例を示し、読者が実践的に統計リテラシーを高める方法を提示している。

第2の狙いは、「扱う内容を可能な限り幅広くすると同時に、内容に体系的を持たせる」ことである。本書では、グラフの基礎知識、平均、代表値、分散、標準偏差、相関関係と因果関係、第3の変数と疑似相関・媒介関係、母集団と標本、無作為抽出法、推定と誤差、質問文・選択肢・質問方法の基本などがとりあ

げられている。こうした内容は、統計の入門書として系統的であり、読者は偏りなく学ぶことができる。また、全15章が興味深い具体例をもとに工夫されて執筆されているため、大学の15回の講義で体系的に指導することが可能である。

第3の狙いは、「読んでいてわかりやすく、楽しい本にしたいということ」である。本書は可能な限り数式などを用いずに、統計の本質が理解できるように工夫されている。多様な分野の実証研究を行い、社会調査教育の経験も豊富な著者が実際に講義を行っているような柔らかい文体とユーモアは、加藤美紀氏の猫を中心としたかわいイラストと調和しており、初学者でも楽しく読みやすい。また、各章には、「Check」、「本章のまとめ」などの困み記事があり、ポイントが理解しやすい。そして、各章の「練習問題」も適切に作成されており、教員は学生に思考力を育む課題を課すことができる。

以上のように、本書は統計の入門書として、データの基礎を学びたい大学生、高校生、社会人、統計をわかりやすく指導したい大学教員、高校教員などにお勧めの1冊である。それだけでなく、著者の社会調査に関する豊富な知識が盛り込まれた「注」には、興味深い情報が多く、初学者以外も改めて学ぶべきことが多いと考えられる。